

① 教育の現場では

東京都立晴海総合高等学校 相談部教諭・キャリアカウンセラー

千葉吉裕

「教育」と聞いて、皆さんは、まず一番に学校を頭に浮かべるのではないのでしょうか。ここ約20年の間で、法的な「教育」の捉え方が変わり、学校を中心に考える教育から、生涯学習を中核に据えて、学校教育、家庭教育、地域の教育を考えるようになってきました。簡単に言えば、学校教育から生涯学習教育への転換です。高度な知識・技能が求められる知識社会になり、多様化・流動化が進み、若い時期の学びだけでは全く通用しなくなってしまう。科学技術の進展に伴い、教わった知識や技能が、陳腐化してしまったり、否定されてしまったりすることが少なくありません。そこで、学校教育の役割、教育方法、教育内容が変わろうとしているのです。

日本の文部行政が大きく舵を切り替えたのは1990年頃です。学習指導要領の基礎基本が「知識・技能の習得」から「意欲・関心・態度」へと変わったり、当時の文部省内の組織が改編されたり、中央教育審議会からは「生涯学習の基盤整備について」が答申されました。その後も、数々の施策が推進されましたが、20年近く経っても、教育が大きく変わったという実感を持てる人は決して多くありません。

学校教育は、すべての国民が画一的に受けてきているので、共通したイメージを持っています。学校を舞台とす

るテレビドラマがそのイメージの象徴ではないでしょうか。そこに描かれる授業風景は、今も昔もさほど変わった様子は感じられません。四角い部屋に、深緑色の黒板があり、生徒全員、黒板に向かって座り、教師の話に耳を傾けながら静かにノートを取る、時々、不規則な発言をする生徒がいると教師が注意したり、教師の目を盗んで他のことをやって怒られたりと、そのような授業風景がよく描かれます。学校は知識伝授型の学習形態で教育を行う所という固定概念は、多くの人に染みついており、違和感なく、このような授業風景が受け止められます。最近では、生徒が、班で話しあったり、演じたり、作ったりといった表現活動をしながら授業が展開される「生徒参加型」の体験を中心とした授業形態が、少しずつ行われるようになってきました。固定観念による邪魔と知識の習得にねらいを定めているため、学習スキルの習得や、学習意欲の喚起を取り入れた方法に変わっていくことができないように感じています。

では、なぜ教育を変える必要があるのでしょうか。教育は、子ども達一人ひとりの成長発達を促し、豊かで良き社会を形成することを役割としています。その結果として、経済的にも豊かな国になることができるのです。今、教育は世界的な競争の中にあります。

国家戦略として、どのような教育を行えばよいのか、各国々は教育を重要政策として位置づけ、鎚を削って検討しています。加えて、近年の脳科学の解明などにより、学習理論はここ数年で急速に新しくなっています。

そのような時代の中にあって、「教育の現場」における大きな課題は、過去の方法論から脱却できず、新しいことに躊躇し、教育改革が進行しないことです。教育は、善し悪しの判断が難しく、これといった正解がないため、様々な意見が述べられます。教育についての一言居士はたくさんあります。保護者も、生徒も、政治家も、企業人も、文化人も、あらゆる人たちが議論に参加できます。その議論は、過去の体験に基づく共通したイメージに支配されることが少なくありません。その結果が、20年近く経っても変化を実感できない教育の現状なのです。

子ども達が、生涯にわたって、文化的生活、職業生活、市民生活を営み、経済的に自立して生きていけるようにするために、今どのような教育を行わなければならないのか、その視点で、教育論議が盛んになることを期待しています。過去の教育にとらわれず、効果的で効率的な教育が実現できればいいですね。教育現場が、今、転換期にあることを多くの人に気づいていただければ幸いです。